令和４年度 文京区議会
自治制度・地域振興調査特別委員会
視察報告書

１　視察日程

令和４年１１月１６日(水)　午後３時～５時

２　視察先及び目的

東京都板橋区

(1)「ＳＤＧｓを見据えた持続可能な区政運営」に関する調査・研究

(2)「ユニバーサルデザイン推進の取組」に関する調査・研究

３　視察参加者

委員長　　岡　崎　義　顕

副委員長　　浅　川　のぼる

理　　事　　海　津　敦　子

理　　事　　名　取　顕　一

理　　事　　高　山　泰　三

理　　事　　品　田　ひでこ

理　　事　　田　中　和　子

理　　事　　板　倉　美千代

委　　員　　のぐち　けんたろう

委　　員　　小　林　れい子

委　　員　　山　田　ひろこ

随　　行　　小　野　光　幸（区議会事務局長）

随　　行　　甲　田　綾　子（区議会事務局議事調査主査）

東京都板橋区

■区の概要

【人　口】　　５６８，６６４人　（令和４年１２月１日現在）

【世帯数】　　３２０，８０６世帯　（令和４年１２月１日現在）

【面　積】　　３２．２２ ㎢

【概　要】　23 区の北西部に位置し、武蔵野の面影を残す赤塚の森や、広大な河川敷を有する荒川など、豊かな自然に恵まれている。戦後の復興と高度経済成長期を経て、高島平団地の開発やマンション建設などにより人口は増加し、住宅都市化が進展した。印刷や業務用機器製造などの工場が集積しており、印刷産業の特徴を生かして絵本文化を発信している。

板橋区議会議場にて

ＳＤＧｓ

１　視察目的

ＳＤＧｓを見据えた持続可能な区政運営に関する調査・研究

２　説明者

板橋区 政策経営部　政策企画課長　吉田　有　氏
政策企画課　髙木　裕太　氏
政策企画課　阿瀬見　有貴　氏

３　事業内容

（１）事業概要

板橋区では、区の総合実施計画である『いたばしNo.１実現プラン』においてＳＤＧｓを重点戦略の柱の一つとして位置付けており、ＳＤＧｓを課題解決のツールとして活用することで未来志向の持続可能な区政運営につなげている。庁内にＳＤＧｓ本部を設置するなど、ＳＤＧｓ推進に向けた事業に全庁的に取り組んでおり、本年５月には「ＳＤＧｓ未来都市」※に選定された。

（２）事業経緯・変遷

＜2018 年（平成 30 年）＞

●国連気候変動枠組条約第 24 回締約国会議（ＣＯＰ24）への参加

12 月にポーランドで開催された、国連気候変動枠組条約第 24 回締約国会議（ＣＯＰ24）におけるジャパンパビリオンでのセッションに参加依頼を受け、環境先進都市としてＳＤＧｓを見据えた区の取組を紹介した。

●ＳＤＧｓ先進度調査における評価

日本経済新聞社が全国 815 市区を対象に実施した「ＳＤＧｓ先進度調査」において、全国総合８位（東京都で１位）の評価を得た。

＜2019 年（平成 31 年）＞

●『いたばしNo.１実現プラン 2021』の策定

区の総合実施計画にＳＤＧｓの考えを取り入れ、実施計画事業とＳＤＧｓの関係性を見える化した。

※ 内閣府が 2018 年よりＳＤＧｓの達成に向けた取組を積極的に進める自治体を公募し、特に経済・社会・環境における新しい価値創出を通して持続可能な開発を実現するポテンシャルが高い自治体を選定する制度

＜2021 年（令和３年）＞

● 『いたばしNo.１実現プラン 2025』の策定

新型コロナウイルス感染症の影響等により区財政が厳しい状況となる中、『No.１実現プラン 2021』を１年前倒しで改訂した。重点戦略の柱の一つにＳＤＧｓを位置付け、「①若い世代の定住化　②健康長寿のまちづくり　③未来へつなぐまちづくり」という３つの切り口から、ＳＤＧｓ推進につながる様々な取組を展開している。

＜2022 年（令和４年）＞

●「ＳＤＧｓ未来都市」に選定される

「絵本がつなぐ『ものづくり』と『文化』のまち～子育てのしやすさが定住を生む教育環境都市～」をテーマとして提案し、その取組が国に認められる。

「ものづくりのまち」「絵本のまち」を軸に、子育てしやすい環境を創出することで若い世代の定住化を促進し、誰もがいつまでも元気に活躍できる学びと緑豊かな環境を創造しながら、未来へ継承し続けるまちの実現に向けた取組を推進している。

（３）ＳＤＧｓ推進に向けた庁内での取組と課題

2021 年（令和３年）に「ＳＤＧｓ推進本部」を庁内に設置し、全庁的な推進体制を強化している。ＣＩ戦略の一環として、ＳＤＧｓ推進にかかるロゴマークの使用促進や、ＳＤＧｓに関する職員向けニュースの発行で職員の意識啓発を図っている。

SDGｓ推進にかかるロゴマーク

板橋区 | Commit our Future Toward SDGs ITABASHI CITY

板橋区は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

また、行政評価においても、施策評価表に施策と関連性のあるＳＤＧｓのゴールを表示するなど、評価の際にＳＤＧｓを意識できるようにしている。

区民に向けたＳＤＧｓの普及啓発としては、学校や地域において板橋区の取組を紹介する出前講座を実施しているが、区民や企業に向けたより一層の普及啓発が課題となっている。

４　質疑応答

Ｑ：庁内職員へのＳＤＧｓの啓発が資料などからもよくうかがえるが、①区民への啓発はどのようにしているのか。②また、ＳＤＧｓの取組などのコンテストなどやったりするのか。③学校教育の中ではどのような取組を行っているのか。

Ａ①：（区の業務について）自分たちのやっていることがＳＤＧｓにつながっているという意識を持ちながらやっている。これをローカライズと言っているが、区民がやっていることの中にも、既にＳＤＧｓになっていることがたくさんあると思

う。そのことに、区民だけてなく企業にいかに気づいてもらえるかが重要であると思っている。

なお、区では２年に１回、区民意識意向調査をやっており、ＳＤＧｓの区民の認知度は２年前は24.3%だったが、本年度は75.4%となった。

A②： ＳＤＧｓコンテストはやっていないが、既存の事業がＳＤＧｓの取組になっていることを参加者に気づいてもらえるよう、認定証をあげるなどの工夫を検討しているところである。また、気づくだけでなく、さらにもう一歩頑張ろうという目標を持ってもらえるような取組を、これから考えていきたい。

A③： 教育委員会におけるＳＤＧｓの取組は、区の中でもより先行しており、例えばクラスごとにＳＤＧｓの目標の番号を取り上げるなど、各学校で様々な取組を行っている。

Q： 板橋区は「絵本のまち」を発信しており、新しい中央図書館が発信拠点となっているが、具体的な事業や取組の内容はどのようなものか。

A： 中央図書館の改築で多目的ホールを整備し、そこで様々な絵本に関するイベントを開催している。また、地域図書館との連携による絵本の読み聞かせや、区内の印刷業者の協力による絵本づくりワークショップ、区立美術館における絵本のイラストレーター育成など、今までは各施設でそれぞれ行ってきた事業を、政策経営部が取りまとめて板橋区のブランドとして育てて発信していこうとしている。

Q： 学校等で出前講座を行っているが、その内容について具体的に伺う。また、ＳＤＧｓの認知度は上がってきても、その中身までを知る機会はなかなかないと思うが、何か工夫はあるか。

A： 学校では既にＳＤＧｓの授業を行っているので、一定程度理解がある前提で区の取組について説明している。また、高齢者など地域の方に向けては、区の取組とあわせてＳＤＧｓ全般についても広く触れるようにしている。学校と地域ではＳＤＧｓへの理解に差があると思うので、それぞれに応じた内容にしている。

また、ＳＤＧｓが学校から子どもたちに広がっていくことが重要だと考えており、来年度に向けた普及啓発の取組の中で、小・中学生を起点とした取組を検討している。区民意識意向調査で、ＳＤＧｓを普及するために必要なことについて聞いたところ、「学校の授業における子どもたちへの普及啓発」という回答が多い結果が出ているため、その点を意識しながら取組を進めていきたい。

Q： ＳＤＧｓを区の政策に全部かぶせてしまうやり方をしているのかと思うが、そのために仕事の負担が増えたということはないのか。

A： 区の施策にかぶせているのでなく、どちらかというと区のやりたいことにＳＤＧｓをツールとして使っているという意識でいる。ＳＤＧｓは区長の強いリーダーシップのもとに推進しているが、「誰一人取り残さない」を分かりやすく伝え

る、ＳＤＧｓを使うことで、伝わりにくいことが伝わったり、今困っている課題がＳＤＧｓを掲げることによって解決できるのではないかという思いでやっている。ＳＤＧｓにかぶせて施策を組もうとすると、職員に負担感や難しい作業が生じるかと思うが、区がやろうとしていることにＳＤＧｓを使っている感覚でいるので、そこまでの負担は特段かかっていない。

また、ユニバーサルデザインの実施計画において、計画事業とＳＤＧｓの１７のゴールとの関係性を整理しているが（『板橋区ユニバーサルデザイン推進計画２０２５実施計画２０２５』79 頁参照）、負担感があるというより、日頃行っている仕事やこれからやろうとする仕事に対して、どうゴールを見据えるかだと思う。ＳＤＧｓは、どこに向かえば一番解決するのかということを職員が見つめ直す機会だと捉えている。

Ｑ：事業のネーミングや見せ方がとても良いが、これらの事業をどのように展開してきたのか。（『ＳＤＧｓを見据えた持続可能な区政運営をめざして』冊子参照）

Ａ：「いたばし子ども夢つむぐプロジェクト」はＳＤＧｓ戦略以前からのものであるが、現在は子ども家庭総合支援センターが開設し、一定程度成果をあげてきている。子どもの貧困対策や児童虐待に総合的に取り組んでいくプロジェクトとしてＳＤＧｓの象徴的な取組になっていけばと思っている。

また、「魅力あるまちづくりの推進」は、ＳＤＧｓの「住み続けられるまちづくりを」を再開発事業の中で示していこうとしたものである。現在、板橋駅、上板橋駅、大山駅において同時並行で再開発工事が進んでいるが、再開発事業がいかにＳＤＧｓであるかということを区民に理解していただく取組が、今色々な成果につながっていると考えている。

Ｑ：持続可能な社会に終点はないと思うが、ＳＤＧｓの取組について、区の方で目標設定をどこに置いて評価しているのか。

Ａ：2030 年を目標としてやっている。板橋区の基本計画を実施するためにＳＤＧｓをうまく使っているが、基本計画の目標の中でＳＤＧｓを達成できる指標に向けて努力をしていくことになる。その中で「若い世代の定住化」、「健康長寿のまちづくり」、「未来へつなぐまちづくり」の３つが、板橋区がＳＤＧｓ未来都市に提案した大きな特徴になる。これらの目標に向かって進めているところであり、計画評価のたびに改善につなげていく。

ユニバーサルデザイン

1　視察目的

ユニバーサルデザイン推進の取組に関する調査・研究

2　説明者

板橋区　福祉部 障がい政策課長　長谷川　聖司　氏

障がい政策課 ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ推進係長　石野田　大典　氏

3　事業内容

（1）事業概要

東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会の開催等を見据え、すべての人が使いやすく暮らしやすい環境を整備するため、2016 年（平成 28 年）にユニバーサルデザイン推進係を設置。条例制定や計画・ガイドラインの策定など、ユニバーサルデザイン推進に向けた体制を構築してきた。時代のニーズや社会構造の変化、技術の進歩を的確に捉え、また、利用者や相手の立場に立って考えることで絶えず改善を図りながら、「すべての人が心地よさを描けるまち」の実現に向けてユニバーサルデザインの推進に取り組んでいる。

（2）事業の変遷

2016 年（平成 28 年）6 月 12 月	ユニバーサルデザイン推進基本方針策定 ユニバーサルデザイン推進条例制定
2017 年（平成 29 年）1 月	ユニバーサルデザイン推進計画 2025 実施計画 2020 策定
2018 年（平成 30 年）2 月 4 月	ユニバーサルデザインガイドライン策定 公共施設整備ユニバーサルデザインチェック体制の構築
2019 年（平成 31 年）3 月	ユニバーサルデザインガイドライン改訂
2021 年（令和 3 年）1 月	ユニバーサルデザイン推進計画 2025 実施計画 2025 策定

（3）ユニバーサルデザインの定義と 7 原則

【定義】

年齢、性別、国籍、個人の能力にかかわらず、一人ひとりの多様性が尊重され、あらゆる場面で社会参加ができる環境を整えること。

↓

すべての人が快適になるようにしようという考え方

【７原則】

① 公平性	だれにでも利用できるように配慮されている。
② 柔軟性	使う人のさまざまな能力に合うように配慮されている。
③ 単純性・直観性	使う人の知識や言語能力等に関係なく、使い方がわかりやすく配慮されている。
④ 認知性	使用状況や個人の能力に関係なく、必要な情報が効果的に伝わるように配慮されている。
⑤ 安全性	だれにとっても危険が無いように配慮されている。
⑥ 効率性・省力性	だれにとっても効率よく疲れないように配慮されている。
⑦ 快適性	使う人の体格や姿勢、移動能力に関係なく、アクセスしやすいスペースと大きさに配慮されている。

（４）事業の主な成果

◆ユニバーサルデザインガイドラインの策定

区職員が、多様な立場の人が抱える困りごとやその対応方法などを理解し、行動できるために必要な知識、取組プロセス、施設整備の基本的な考え方をまとめた。

◆職員の認知度向上

職員への意識啓発として、広報誌の発行や研修を実施した結果、平成 29 年度は約５割だったユニバーサルデザインの認知度が令和３年度は約８割まで増加した。

◆ユニバーサルデザインチェック体制の構築

公共施設の改修時などに、その建築物がユニバーサルデザインの考え方に適合しているかなどを確認する「ユニバーサルデザインチェック（ＵＤチェック）」体制を構築した。

（５）今後の課題と展望

・区民におけるユニバーサルデザインの認知度は約３割にとどまっているため、区民・地域活動団体・事業者への意識啓発をより一層図るとともに、多様な人を理解する学びの機会を充実させる。

・公共施設整備については、施設の価値を高める設計となるよう調整を進めるとともに、今後は竣工後の評価・改善につなげていく。

・さらなるユニバーサルデザイン推進に当たっては、庁内での連携を強化し組織横断的に取り組むことに加え、まちづくり当事者である区、区民、事業者、地域活動団体が相互に連携して課題解決に取り組む体制づくりが必要となる。

ユニバーサルデザイン
啓発パンフレット

4　質疑応答

Q：　平成 28 年度から事業を進めてきて、ＰＤＣＡサイクルによって計画を練り直したり見直したりしてユニバーサルデザインの好循環（スパイラルアップ）につなげた事例があれば伺う。

A：　まず、職員が理解、実践していくことが大事である。毎年実施している職員アンケートで、保育士のユニバーサルデザインに対する認知度が事務職等に比べて低かったという結果を受け、担当課の職員が研修や啓発等に色々取り組んだことで、認知度向上につながった。

　また、施設整備に当たっては、設計の段階から「ここの動線のところで障害のある方が来たらどうするのか」という指摘をして担当課に考えてもらう。それだったらこういうふうにしよう、でもこういう人はどうしようか、などと考えていくことでスパイラルアップにつなげている。

Q：　施設や学校等の建物を造る時に、障害者や高齢者などあらゆる人達が快適に過ごせるように、当事者の意見を取り入れていくことを繰り返し行っているのか。

A：　ユニバーサルデザイン推進協議会を年３回開催しており、委員には障害者の方も入っている。視覚障害者の方からは動線について的確な指摘を受けたり、知的障害者の親御さんからは支援学校の表示について有益な意見をいただいたりすることが多々あるので、そういった意見を聞きながらスパイラルアップにつなげる努力を続けている。

Q：　建物の竣工後にも評価を行い、改善した事例はあるのか。

A：　ユニバーサルデザインのチェック（ＵＤチェック）体制は、平成 30 年度から運用しており、建物を建てるときの基本計画の段階、基本設計の段階、実施設計の段階でチェックをした後、竣工後を評価するものである。

　ただ、竣工後３年目にチェックをすることになっているので、来年度に初めてチェックする事業が出てくる。

Q：　建物の改修においては、ユニバーサルデザインよりもバリアフリーのほうが優先的に行われているのか。

A：　ＵＤチェックの対象については基本的に新築、改築、増築、大規模改修については全て対象になっており、公園についても新設と全面改修については対象になっている。バリアフリーを優先するということではなくて、その中でユニバーサルデザインとして何ができるのか、それぞれのタイミングでチェックをしていく。

Q：　ユニバーサルデザインを推進していくに当たっては、職員が障害者差別解消法をしっかりと理解していないといけないと考えるが、研修等はされているの

か。

Ａ：　職場においてＯＪＴとして研修を行うよう、各所管課にお願いしている。職員用のポータルにおいても、改善内容等がいつでも職員が見られるようにしている。

　また、保育園職員向けの研修では、ユニバーサルデザイン全体の話の中で、障害者差別解消法の説明をした上で、障害者目線をどうするのか、子供に対してどう対応するのか、それが職員にとってどのようにユニバーサルデザインになるのかについて研修できるような内容で取り組んでいる。

視察成果のまとめ

ＳＤＧｓとユニバーサルデザイン

岡崎　義顕　委員長

板橋区はＳＤＧｓを見据えた持続可能な区政運営をめざして、「絵本がつなぐ『ものづくり』と『文化』のまちの実現」を提案し、令和４年度にＳＤＧｓ未来都市に選定された。これまでも「絵本のまち“板橋”」を推進しており、さらに「ものづくりのまち」「絵本のまち」のブランド力を高め、交流とにぎわい・子育てしやすい環境を創出することによって若い世代の定住化を促進するとともに、未来へ継承し続けるまちの実現に向けて、ＳＤＧｓをより一層推進していく取組をしていた。区民の皆様がＳＤＧｓの取組に意識をもっていただく事が大切だと実感した。

ユニバーサルデザインの推進については、「誰一人取り残さない」ＳＤＧｓと同じ方向性をめざしているものであり、体制の整備とともに、その実現のために区職員の意識啓発を積極的に行っていた。今後は組織横断的に一丸となって取り組むことが必要とのことであった。

今後の議会活動の参考にしたい。

他自治体の取組を学んで

浅川　のぼる　副委員長

板橋区が取り組んでいる興味深い２つの事業について視察し、担当の方からご説明を受けた。

はじめに、「ＳＤＧｓを見据えた持続可能な区政運営に関する調査・研究」ということで、板橋区基本計画の進捗状況、改定の背景や経緯、計画の構成や進行管理、財政計画等について伺った。配付された資料の見やすさと、各事業のタイトルが分かりやすいという印象を受けた。

次に、「ユニバーサルデザイン推進の取組に関する調査・研究」について、すべての人が快適になるようにしようという考え方のもと、ＳＤＧｓや公共施設関連も踏まえた取組を伺った。

文京区においても、計画作成の際に現状と課題を見極め、めざす将来像や取組の指針と視点を定め、施策や重点事業の構成を図り、わかりやすい事業名と資料の作成を心掛けるなど、今回の視察を通して学んだことを参考に、さらに文京区の施策内容の充実を働きかけていきたい。

実感。ユニバーサルデザイン後進自治体・文京区

海津　敦子　委員

国は、2018 年「ユニバーサル社会実現推進法」を制定し、自治体のユニバーサル社会実現に向けた責務を規定している。ユニバーサルデザインは、「あらかじめ、障害の有無、年齢、性別、人種等に関わらず多様な人々が利用しやすいよう都市や生活環境をデザインする」という考え方で、ＳＤＧｓの「誰ひとり取り残さない」社会の実現とも合致する。

板橋区は「誰もが差別感や疎外感を持たず、誰もが同じ動線で同じように危険なく、誰もが使い勝手良く施設や設備を使える」ユニバーサルデザインの社会の実現に向け日々邁進し、自治体の責務を果たしている。

一方、文京区は「なにに困っているか。不安に直面しているか」というユニバーサルデザインの観点をもって計画・設計を行わず、障害のある人の不便は「しょうがないものだ」という障害観で、事業が進められている。新しく建て直す学校でさえ、主要な階段から離れたところにエレベーターを設置し、車いす等利用者に遠回りを強いる設計状況。理由は「施設全体の使いやすさが最優先で障害のある人は我慢してもらうしかない」というものである。ユニバーサルデザインとかけ離れた設計がまかり通る文京区の周回遅れの現状を、改めて認識した。是正に努めていきたい。

板橋区役所を視察して

名取　顕一　委員

ＳＤＧｓを見据えた持続可能な区政経営とユニバーサルデザインの推進についてお話を伺った。

どの地方自治体もこの考え方で、区政運営を今までも行ってきたものと考える。

基本構想を上位計画とし、それに紐づける形での 17 のゴールと 169 のターゲットに向かっての運営、板橋区の場合その見せ方が非常に上手であり、区民にわかりやすい戦略と位置付けている点はわが区も見習うところが多いと感じた。

特に子どもたちに対して、授業を始め、様々な機会を使って広げることを意識して行っており、それが功を奏していると感じた。

２年前は区民のＳＤＧｓの認知度が 24.3%だったものが 75.4%まで増えており、区民への周知も成功していると感じた。

また、ユニバーサルデザインについても、同じく誰一人取り残すことなく、すべての人が快適になるようにしようという考え方で、例えば児童施設、公園等の改修時にこの考え方をしっかりと入れていこうと全庁に発信し、その考えの浸透を図っている点。また、改修後でも改善点を常に考えていく姿勢でユニバーサルデザインの好循環（スパイラルアップ）を一丸となって進めている点は感銘を受けた。

視察を終えて

高山　泰三　委員

数年前からＳＤＧｓについては、話題に上ることも多かった。しかし、そもそも 17 もの目標があり、具体的に今までと何をどう変えたら良いのかについては、必ずしも明確ではなかった。17 の目標はどれをとっても正しいことなのではあるが、今まで文京区が取り組んできた目線からすれば当たり前のことであり、ありきたりなスローガンを羅列しただけのものにしか思えなかったからである。17 の目標に向かって一つ一つ何らかの行動計画を具体的に立てて、事業に落とし込んで実行してゆくということはかえって、面倒な計画づくりの仕事を増やすだけなのではないかとすら思っていた。

しかし、今回板橋の話を伺い、従来の私の発想とは真逆のアプローチでＳＤＧｓに取り組んでいることに大変感心した。つまり、17 の目標に向かって進んでゆくのではなく、従来からの取組に対して、それを後押しするスローガンとしてＳＤＧｓと 17 の目標を利用しているのである。文京区も板橋区に習って、流行のＳＤＧｓを取り入れつつ、うまく区の取組を推進する体制を作るべきであると感じた。

また、ユニバーサルデザイン推進の取組については、「もてなしの心を大切に、すべての人が心地よさを描けるまちいたばし」というキャッチフレーズも大変素晴らしい。それらを紹介する冊子からして、デザイン性やメッセージ性に優れていると感じた。板橋は絵本の街を売りにしているが、文京区もうまい売り出し方を考えたい。

板橋区のわかりやすい、見せる政策に感動！

品田　ひでこ　委員

板橋区を視察させていただき正直驚いた。なぜなら、「区が進めている政策」が区民にわかりやすく伝わっているからである。重点戦力の伝え方やアプローチの仕方が実に戦略的に行われている点が素晴らしいと感じた。そして、目的と施策がマッチして極めて明快である。事業の啓発から目的達成、成果を上げるプロセスが短期に実績を上げている。

以下優れた点を挙げる。

＜ＳＤＧｓを見据えた持続可能な区政運営＞

①「ＳＤＧｓ未来都市」に選定された。②「絵本をつなぐ『ものづくり』と『文化』のまちの実現」～子育てしやすさが定住を生む教育環都市～を掲げ、具体的に「絵本のまち“板橋”」を推進している。③「ものづくりのまち」「絵本のまち」のブランド力を高め、若い世代の定住化、強いてはＳＤＧｓをより一層推進していく。④ＳＤＧｓ普及啓発の出張講座（小学校・区内高校・地域向け）⑤ＳＤＧｓ推進のロゴマーク使用促進。⑥ＳＤＧｓの区民の認知度を２年間で 74.5 にまで引き上げた。⑦ＳＤＧｓを課題解決のツールとしている。⑧基本構想のパンフレットもコンパクトでデザイン性が高い。

＜ユニバーサルデザインの推進＞

①平成 28 年からユニバーサルデザイン推進基方針策定が始まる。② 2025 年を目標に「いたばし№１実現プラン 2025」を実施計画として取り組む。③「すべての人が快適になるようにしよう」という考え方。④ユニバーサルデザイン啓発パンフレット「まちのなかで気づくかな？」はアイデアグッズとして活用。

ＳＤＧｓは１つのツール

田中　和子　委員

いただいた資料には、さすが「絵本のまち板橋」と心がおどり、開けてみたくなるリーフレットが置かれていた。区の基本構想までがミニチュア絵本のように、読みやすいスタイルになっている。

板橋区は今年、地方創生の促進を目的とし、すぐれたＳＤＧｓの取組を提案した自治体として内閣府の「ＳＤＧｓ未来都市」に選ばれている。板橋区は政策すべてにＳＤＧｓをかぶせているのか？なぜ熱心にＳＤＧｓに取り組むのか？得た回答は、板橋区は人口の転出超過であり、若い世代の定住を促進する必要があること、区の政策とＳＤＧｓに親和性があり区政を進める１つのツールであることであった。これで納得。どの自治体も政策の一部にＳＤＧｓを取り入れている。むしろ政策の遅れた部分にＳＤＧｓの力を借りることも必要と感じた。

ユニバーサルデザインについては、絵本でつながる交流都市ボローニャは「市民参画のまちづくり」で有名な都市である。そこから学ぶものも多いと感じた。

2022 年５月にＳＤＧｓ未来都市に選定された板橋区の取組について

板倉　美千代　委員

板橋区は、「絵本のまち“板橋”」を標榜し、絵本を通して、だれ一人取り残さないＳＤＧｓの基本理念を基に、ユニバーサルで持続可能な街づくりを進めていくとのことであった。元々は文京区が印刷製本のまちだったので“お株”を奪われたような気がしたと同時に、印刷製本業が集積しているという大きな“強み”を生かし、絵本に親しむというだけでなく、「ものづくり」「まちづくり」へと発展させる可能性が大いにあり、うらやましく感じた。

ＳＤＧｓ、ユニバーサルデザイン普及啓発のために学校や地域向けの出前講座の取組の紹介もあり、言葉として聞いたことはあっても、内容を理解してもらうにはまだまだ時間を要するように思った。

説明の最後に言われた「ＳＤＧｓに合わせた計画ではなく、計画をＳＤＧｓに合わせる」というのが、一番印象に残った。

板橋区役所視察を終えて

のぐち　けんたろう　委員

板橋区役所におけるＳＤＧｓとユニバーサルデザインの取組について感じたことは、区長自らの意思の強さが職員全体に波及し効果が広がっていったことに思う。ＳＤＧｓが世に出始めた頃は世間にも板橋区職員にも浸透していなかったＳＤＧｓの目標について一つ一つ具体的な例示や板橋区における行政課題に当てはめて取り組んでいった結果、職員に広く浸透し区の行政に反映されていく土台ができていった。

また、ユニバーサルデザインについても印象的であったのは板橋区の区有施設全体に行き渡らせるという考えのもと、新築はもちろん改築や増築などであっても、どこかしらにユニバーサルデザインを反映させ、これからの板橋区はすべてユニバーサルデザインで統一されていくという考え方であった。質問でも上がったのだが、古い建物の躯体であったりした場合、ユニバーサルデザインをそのまま当てはめることは難しいのだが、まずは利用者の目線に立ちデザインをして行くことを優先していく姿勢は、文京区のこれからの建物計画においても見習うべき点である。建物を作るということももちろんであるが、職員にも意識の浸透を図りユニバーサルデザインの基本理念である誰にとっても平等で使いやすい目線を忘れないようにすることは時間と労力がかかるであろうが、行政として維持していくことの大切さを学ぶことができた。

ＳＤＧｓを目標達成の原動力に～板橋区の取組に学ぶ～

小林　れい子　委員

政策にＳＤＧｓの視点を当てはめることは文京区でも行っているところだが、板橋区では今、目の前にある課題に「気づき→理解を深め→ともに解決へ」向かうためのツールとして活用。「総合計画」に取り入れ、「重点戦略」の柱とし、組織横断的にＳＤＧｓの理念という横串をさしたことで、従来の縦割りではなく、各所轄課と共有しながらの複合的な取組が実践できている。

また、「ユニバーサルデザインの推進」にも同様に活用し、職員や区民への周知啓発に努め、ＰＤＣＡサイクルで改善しながら、複雑化する課題に取り組んでいる。その結果、たとえば公共施設整備の際に障がい者等の視点を生かすことにつながり、課題が解決できない際にも「ユニバーサルデザインチェック」を行うことで、代替手段を模索しながら合理的配慮を行えるよう改善に努めているとのことだ。今後、学校改築など公共施設整備が続く文京区においても、そうした体制をぜひ取り入れるべきだと感じた。

視察を終えて

山田　ひろこ　委員

区の進める事業が基本計画をもとに実施計画の中で行われているが、ＳＤＧｓの 17 のゴールとの関係性が一目でわかる表をその実施計画の中で示しているところや、施策評価表モニタリングの中でもＳＤＧｓの関連性のあるゴールと紐づけて示しているところは、庁内における取り入れ方も先行していると感じた。そして、組織図を見ても政策企画課の中に総合調整係と並んで、計画・ＳＤＧｓ係があり、障がい政策課の中にユニバーサルデザイン推進係を組織として明確に置いているところ、専門家も配置している点等見習いたい。ＳＤＧｓを職務に被せているのでなく、遂行する職員に対してゴールをどう見据えるか、どこに向かうのが一番解決しやすいのかというツールとしてＳＤＧｓを使っているという視点は大変参考になった。

本年度の内閣府が選定した「ＳＤＧｓ未来都市」に選定されたが、ＳＤＧｓの理念に沿った基本的・総合的取組を推進しようとする都市に相応しいと感じた。また、そのポテンシャルも高いと感じた。